

藤原北古墳群

1993年3月

総社市教育委員会

序

総社市は古代吉備の中心地として栄え、数多くの埋蔵文化財の存在が知られています。特に「古代と21世紀をむすぶ風格ある文化創造都市」をめざす本市では、それらの遺跡と調和したまちづくりを進めることができると考えます。このため本市教育委員会としても遺跡の保護保存については慎重に対処してまいりました。

しかしながら、近年は市内でも大型事業に伴う大規模な開発が増加し、文化財の保護と開発の調和は大きな問題となっています。

今回報告する藤原北1号墳・2号墳も民間企業による山土採取によって発見された古墳ですが、たび重なる協議にもかかわらず現状での保存は困難なため、止むを得ず、発掘調査を行い記録保存を図ることとなったものです。

発掘調査の結果、1号墳は7世紀前半、2号墳は6世紀後半の古墳であることが判明いたしました。

この調査報告書が考古学の研究資料として活用されれば、幸いです。

発掘調査にあたっては岡山県教育委員会、株式会社たけうちをはじめとする関係各位から多大な御指導と御協力をいただきました。さらに、残暑の中、発掘作業にお骨折りいただきました作業員の皆様にあわせて厚くお礼申し上げます。

平成5年3月

総社市教育委員会

教育長 浅沼 力

例　　言

1. この報告書は、山土採取に伴い、株式会社たけうちから委託をうけて、総社市教育委員会が実施した「藤原北古墳群」の発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は武田恭彰が担当し、平成3年8月20日から8月30日まで実施した。
3. 出土遺物の整理は、社会教育課服部収蔵庫にて行い、報告書作成後は同所に保管している。
4. 本報告書の執筆、編集は武田恭彰が行った。
5. 遺物整理、報告書作成にあたっては、西平登代子（社会教育課服部収蔵庫）の協力を得た。
6. この報告書の高度値は海拔高であり、造構実測図の方位は磁北である。
7. 第2図の地形図は、国土地理院発行の50,000分の1の地図（岡山北部）を複製したものであり、その他は総社市発行のものを複製したものである。
8. この報告書に関する実測図、写真、遺物等は、服部収蔵庫で保管している。

目 次

序 文

例 言

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 調査の体制	2
第2章 地理的歴史的環境	2
第3章 発掘調査の概要	6
第1節 位置と環境	6
第2節 藤原北1号墳	8
第3節 藤原北2号墳	16
第4節 まとめ	21
第5節 中世土壙	23
第4章 考察	25

図 目 次

第1図 遺跡の位置	1
第2図 遺跡の位置	3
第3図 周辺遺跡分布図 (S = 1 / 10,000)	4
第4図 藤原北1・2号墳位置図 (S = 1 / 400)	7
第5図 1号墳墳丘図 (S = 1 / 100)	9
第6図 1号墳墳丘断面図 (S = 1 / 40)	10
第7図 1号墳石室平面図 (S = 1 / 40)	11
第8図 1号墳石室平面・断面図 (S = 1 / 40)	12

第9図	1号墳石室平面・断面図 (S = 1/40)	13
第10図	1号墳出土遺物 (S = 1/4 + 1/8)	15
第11図	2号墳墳丘図 (S = 1/40)	17
第12図	2号墳墳丘断面図 (S = 1/40)	18
第13図	2号墳石室平面・断面図 (S = 1/40)	19
第14図	2号墳石室平面・断面図 (S = 1/40)	20
第15図	2号墳出土遺物 (S = 1/4)	21
第16図	中世土壤平面・断面図 (S = 1/20)	23
第17図	出土遺物 (S = 1/4)	23
第18図	本谷遺跡・伊田冲遺跡出土遺物 (S = 1/6)	24
第19図	石室平面・断面図 (S = 1/100)	28
第20図	石室平面・断面図 (S = 1/100 + 1/80)	29
第21図	石室平面・断面図 (S = 1/100)	30
第22図	石室平面・断面図 (S = 1/100)	31

図 目 次

図版 1	1. 藤原北古墳群遠景	2. 1・2号墳調査前	33	
図版 2	1. 1号墳石室塞石 (南から)	2. 1号墳石室塞石遺物出土状態	34	
図版 3	1. 1号墳石室 (南から)	2. 1号墳遺物出土状態 (南から)	35	
図版 4	1. 1号墳石敷 (北から)	2. 1号墳石敷除去後 (南から)	36	
図版 5	1. 1号墳石室 (南から)	2. 1号墳奥壁 (南から)	37	
図版 6	1. 1号墳石敷除去後 (北から)	2. 2号墳調査作業遠景	38	
図版 7	1. 2号墳全景 (南から)	2. 2号墳石室 (北から)	39	
図版 8	1. 2号墳石室床面遺物出土状態 (北から)	2. 2号墳石室床面遺物出土状態 (南から)	40	
図版 9	1. 2号墳石室 (東から)	2. 2号墳石室石敷除去後 (南から)	41	
図版10	1. 中世土壤検出状態	2. 中世土壤土釜出土状態	42	
図版11	1. 2. 1号墳出土土器	3. 4. 1号墳閉塞部出土土器	43	
図版12	1. 2号墳出土土器	2. 中世土壤出土土器	3. 1号墳出土鐵刀	44

第1章 調査の経緯

第1節 調査にいたる経緯

岡山県の南西部に位置する総社市には、吉備高原の南端に連なる低丘陵が無数に存在している。これらの丘陵には、数多くの古墳が築造され県内でも有数の古墳密集地として知られている。しかし、古墳が所在する丘陵が花崗岩の風化土で良質の真砂土であることが多く、市内各所で採土が行われている。今回、調査を行った丘陵に於いても、採土に伴い高本古墳群5基の発掘調査が2次にわたって総社市教育委員会によって行われ、報告書も刊行されている。

平成3年6月5日に、株式会社たけうちから事業計画面積9,600m²の山土採取事業計画が出された。この地域は、10数基で構成される藤原北古墳群の位置する丘陵の東端にあたり、周知の古墳はなかったものの、その存在が十分予想された。このため樹木伐採後、計画地域の現地踏査を行った。この時点で古墳らしいかまりを確認した。そこで8月7日に確認調査を実施し、横穴式石室墳1基を確認した。

この結果をもとに株式会社たけうちと文化財保護に関する覚書を締結し、保存協議を重ねた。



第1図 遺跡の位置

その結果、計画地の中心に古墳が位置し、墳丘の近くまですでに掘削が進み、崩落の危険があること、採土は岡山県立大学の建設にとって不可欠であること、などから現状保存は極めて困難と判断された。このため市教育委員会では、止むを得ず発掘調査を行い、記録保存の処置を行うこととなった。

なお調査中に墳丘が殆んど流失し、埋没していた2号墳を発見し調査を実施した。

第2節 調査の体制

発掘調査は、株式会社たけうちの経費全額負担により、総社市教育委員会が岡山県教育委員会の指導助言のもとに実施することとなった。調査は平成3年8月20日から30日まで実施した。調査にあたっては、県教育委員会をはじめ研究者の方々から指導助言をうけ、また株式会社たけうちには経費の負担をはじめ種々の便宜を図っていただいた。また、発掘作業には下記の方々に残暑の中、大変御苦労をいただいた。記して厚く謝意を表します。

調査組織

社会教育課（文化係）

課長 平田定士

主幹 村上幸雄

係長 森田忠志（庶務）

主事 荒木泰行（庶務）

主事 武田恭彰（調査担当）

作業員 福田次夫、柏野三郎、田中龜、山田実、松本和子、東秀己

遺物整理 西平登代子

第2章 地理的歴史的環境

藤原北古墳群は総社市久代藤原に所在する。

総社市は岡山県南西部に位置し、北は吉備高原南端、南は標高200m級の山に挟まれた東西に細長い平野にある。この平野の中央を、中国山地に源を発する岡山三大河川の1つ高梁川が南に流れている。現在は流路が安定している高梁川も、かつては平野部に出た所から東に分流し、数本の旧河道を形成していたようである。この分流は足守川と合流し、さらに吉備津へそそぎ、総社地域と海をつなぐ交通路として機能していたと考えられている。また河川が、形成する肥沃な冲積地は人々に恰好の生産基盤と居住地を提供することとなり、縄文時代以降、数多くの遺跡が残されている。

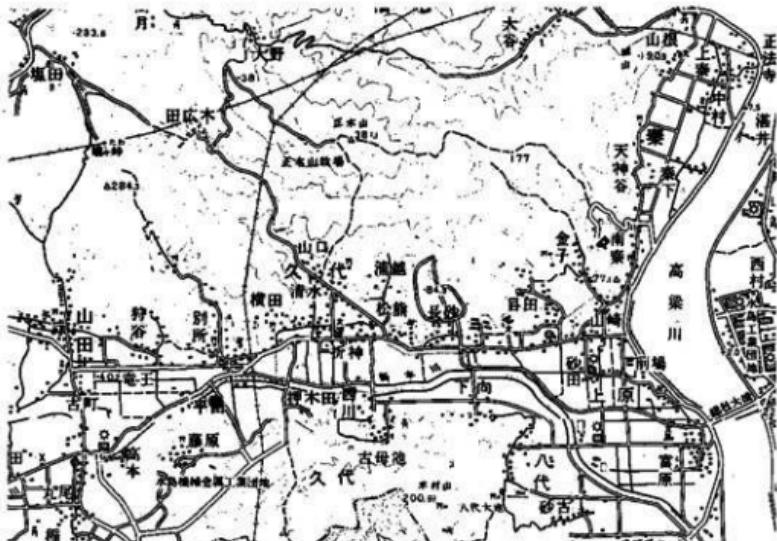
特に、総社平野から足守川流域は吉備文化の中心地として、全国的に著名な遺跡が密集している。

市内に限っても、全国第9位の作山古墳、こうもり塚古墳、江崎古墳、また備中国分寺・国分尼寺・備中国府堆定地などが挙げられる。

今回、調査を行った藤原北古墳群は高梁川に合流する新本川によって形成された小平野の中流域の丘陵にある。この高梁川右岸地域は、左岸の総社平野ほどは遺跡が存在しない。これは東西に細長い平野の中央を東流する新本川の流路が一定ではなく、安定した生産基盤が確保できなかったことや平地部の狭小さによるものと思われる。

この平野に集落が形成されるのは弥生時代中期頃である。そして後期になると、市内の多くの遺跡と同様に集落数が飛躍的に増加する。この結果、後期の後葉には、伊与部山墳丘墓・立坂墳丘墓などが丘陵部に築造される。

古墳時代になると、新本川下流域の左岸丘陵部に系列的関係をうかがわせる前方後円墳が築造される。その後5世紀になると砂子山古墳群にみられるように系列的な前方後円墳は上流域に集中するようになる。これらの首長墓は、いずれも全長50~60mどまりであり、水系を共有する一地域政治集団と考えられる。また、これらの首長墓を支えた前期群集小墳も多数築造された。これら低小な墳丘で、箱式石棺や木棺直葬を内部主体とする古墳は、新本川両岸の低丘陵上に密集している。このうち、高本古墳群・長砂古墳群などについては、近年一部が発掘され詳細が明らかになっている。



第2図 遺跡の位置 (S = 1 / 50,000)



第3図 周辺遺跡分布図 ($S = 1/10,000$)

後期古墳の最も顕著な指標となるのは横穴式石室の採用である。この型式の石室は朝鮮半島から九州を経由して、畿内や吉備に伝えられたと考えられている。総社市域は吉備地域の中でも比較的早く横穴式石室が導入されたとみられ、新本川流域でも、楓木林の塚古墳がこの時期と考えられている。6世紀中葉の横穴式石室普及期になると、立板北1号墳・板井砂奥7号墳など類例が増加し、後期古墳の内部主体の大半を占めるようになる。

古墳時代後期の古墳築造と生産活動については近年、この地域で行われた大規模開発に伴う発掘調査によってかなり明らかになっている。

昭和61年から62年にかけて行われた水島機械金属工業団地協同組合西団地内遺跡群の調査では、古墳が7群36基、5製鉄遺跡で炉62基・横口付炭窯16基が調査された。古墳群では、全長26mの前方後円墳の立板北1号墳から、7世紀末の立板北3号墳まで間断なく継続して築造と追葬が繰り返されていることが確認されている。また、製鉄遺跡は7世紀代のものが大半で、原料に鉄鉱石を使った大規模な製鉄遺構が古墳と立地を重複して確認された。古墳時代の製鉄については従来、中国山地の小規模な砂鉄を使った製鉄遺跡についてしか明らかではなかった。しかし平成2年、やはり市内東部の千引かなくろ谷製鉄遺跡から6世紀後半の鉄鉱石を使った大規模な製鉄遺跡が発見された。これら吉備中枢部で相ついで発見された古墳時代の製鉄遺跡は、単に技術史の研究のみでなく、吉備地方の生産活動と社会構造を解明する上で大きな意義をもつと思われる。

古墳と製鉄遺跡の関係については、ほぼ同時期で近接、もしくは重複し、鉄滓の供獻が一部の古墳にみられるなど製鉄集団と、古墳の被葬者になんらかの関連が考えられる。

一方、これらの製鉄、造墓活動を支えた生産基盤としては新本川沿いの低位部の水田が考えられよう。この地域で古墳時代の集落の調査例として右岸の屋敷・稻荷遺跡がある。西団地遺跡群より1km上流の北向きの緩斜面で、6・7世紀のカマド付き住居址60軒が調査された。このように新本川流域の山裾の緩斜面にはかなりの密度の集落の存在が予想できる。

また、高梁川右岸地域は後期群集墳の規模、数においては左岸地域に及ばないが、終末期に県下唯一の横口式石棺の長砂2号墳、中国地方では1例しかない飛鳥期創建の秦原廃寺など注目すべき遺跡がある。

新本川流域は律令体制下においては、下道郡の北半にあたる。南半分の吉備郡真備町は下道氏の本貫地であり、山陽道が通り吉備寺式瓦をもつ箭田廃寺など寺院と墳墓が集中している。

これに較べ北半地域では現在までに古代の目立った遺跡は確認されていない。

第3章 発掘調査の概要

第1節 位置と環境

調査墳は、総社市久代藤原に所在する。

古墳群の所在する丘陵は、新本川に接した右岸の北東から南西に連なる長さ1kmの独立した丘陵で久代・山田・新本の大字境が通る。この丘陵は大別すると標高103mの最高部を中心とした山田・久代（藤原）地区と、新本字高本地区、そして西の新本沖地区の三地域に別けられる。

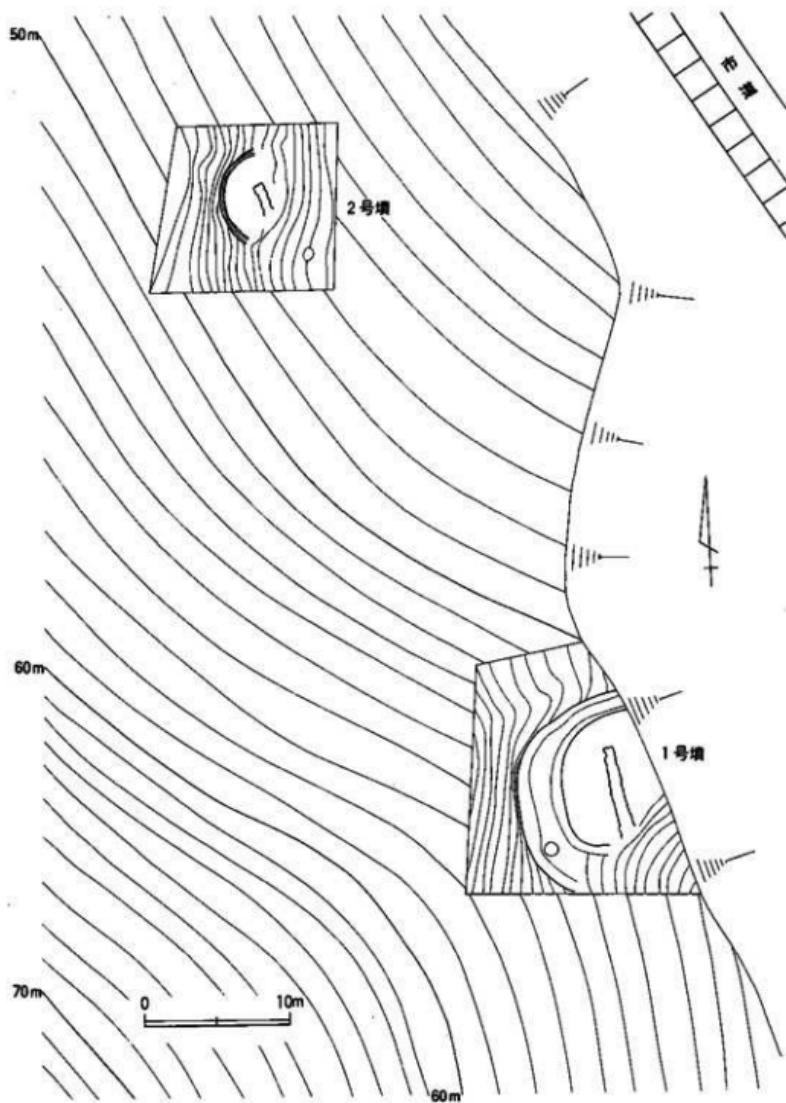
このうち新本沖地区には古墳は確認されていない。高本地区では南面が水島機械金属工業団地協同組合西団地の造成によって大きく掘削され、北斜面から尾根頂部にかけても採土工事によって大きく削られている。これらの開発に伴う発掘調査により南斜面では弥生時代後期の集落址が確認され、尾根稜線上から北西に派生する尾根に所在する5基の前期古墳についても2次にわたって発掘調査が行われた。

山田・久代（藤原）地区の尾根稜線上には、現在までに12基の前期古墳が確認されている。

また、発掘調査に伴う現地踏査によって南向きの緩斜面に3基の横穴式石室を有する古墳を確認した。藤原北1・2号墳が所在する東斜面は、裾部を道路によって東西に切断され、果樹園等により、かなり改変をうけている。また、古墳の位置する等高線より上は急峻で露岩が多く、古墳は存在しないが、南東の緩斜面には須恵器・土師器が散布し、集落遺跡の存在の可能性が考えられる。

採土計画は、この東斜面から尾根の頂部までを対象としている。

調査墳のうち、1号墳は頂部から派生する小尾根の標高50m付近に位置する。2号墳は1号墳より下方の谷部斜面の標高45m付近に位置している。1号墳の石室は南に向って開口するが前面には小さな谷を挟んで頂部より派生する別の尾根が視界をさえぎっている。2号墳も1号墳の尾根にさえぎられ、眺望が良好ではない。また、藤原池をはさんで対面する水島機械金属工業団地協同組合西団地内遺跡群の古墳の多くが尾根の等高線に直交して石室が築造されているのに対し、2基の古墳の石室は等高線に平行している。このことは2基の古墳の築造にあたっては眺望や立地よりも石室の開口方向が優先されたと言えるであろう。



第4図 藤原北1・2号古墳位置図 ($S = 1/400$)

第2節 藤原北1号墳

1. 墓丘・周溝

古墳は東に派生する小尾根の緩斜面に位置し北と南は谷部となっている。表土を重機により除去し、石室を確認した時点では目立った墳丘らしいものは認められなかった。ただ山側を切削して周溝を掘削したであろう段状の産みが確認できた。

墳丘は石室前面で流出し、東半分は崩落の危険があるためトレンチを掘り下げることができなかった。そのため残存した部分により墳丘の概要を推定した結果、側面がやや直線的な部分はあるが、直径9mのややいびつな円墳と考えられる。

盛土の状態は2方向のトレンチで観察した。墳丘は大半が流出していたが、山側の急斜面を掘削した周溝で形を整えて均等な厚みで石室に近い部分より黄褐色土を積み上げている。

石室に近い部分は盛土が比較的よくかためられている。特に奥壁の後の部分は、粗い黄褐色土と細い砂質土を交互に入念につき固めている。

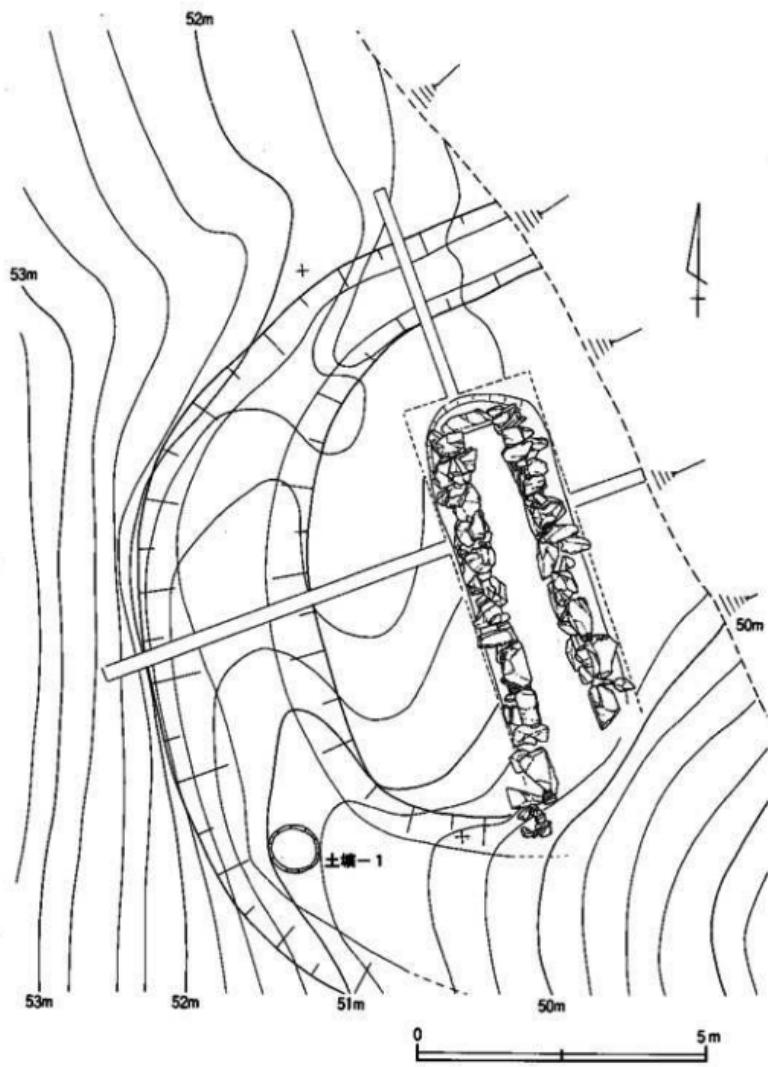
周溝は、石室の後背部分は狭く、側面部分は直線的に広い。前面に屈曲する部分からより広くなると推察できるが詳細は流出しているため不明である。また、屈曲部の底面で直径50cmの端部が被熱赤化し炭がついた土壤を検出した（土壤-1）。この土壤は周溝の覆土によって埋まり、周溝の底面に炭が流出していることから、古墳築造と同時期のものと思われる。その性格としては、古墳埋葬時の祭祀の可能性を考えられよう。

2. 横穴式石室

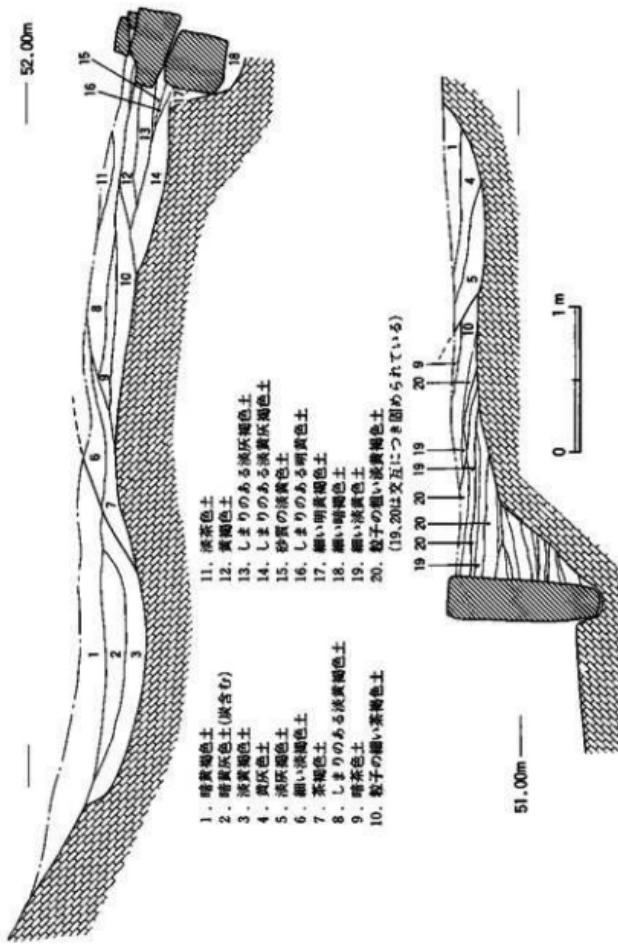
横穴式石室は墳丘のほぼ中央に築造され、南方向に開口する、石室の平面形には袖部が認められず、羨道と玄室の明確な区別はない。残存する石室の全長は6.5mで主軸方向はN22°Wである。

調査時には石室は完全に埋没し天井石は一枚も残っていなかった。石室の覆土中に転落した側壁の石が認められるため本来の石室高は現状の奥壁の高さ程度と考えられる。

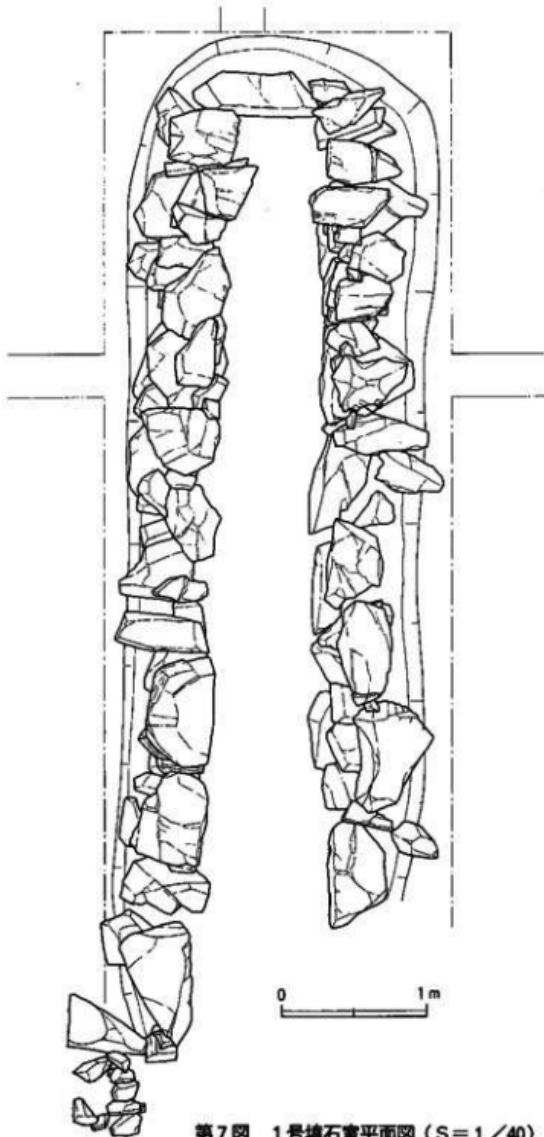
石室の掘り方は後半は地山（花崗岩風化土）を掘り込み、前半分は2次堆積の淡黄灰色の砂質土を整地している。このため石室の床面は地山部分では水平であるが、2次堆積土部分は開口部にかけて傾斜している。奥壁は100×90cmの一枚石である。石室の側壁の積み方も、掘り方の基盤の塊で変化し、平面形態もこの境目で若干せばまる。これは恐らく、羨道と奥壁部を区別した意識の名残と考えられる。石室後半部の左右の壁の基底部には不整形ながらも比較的



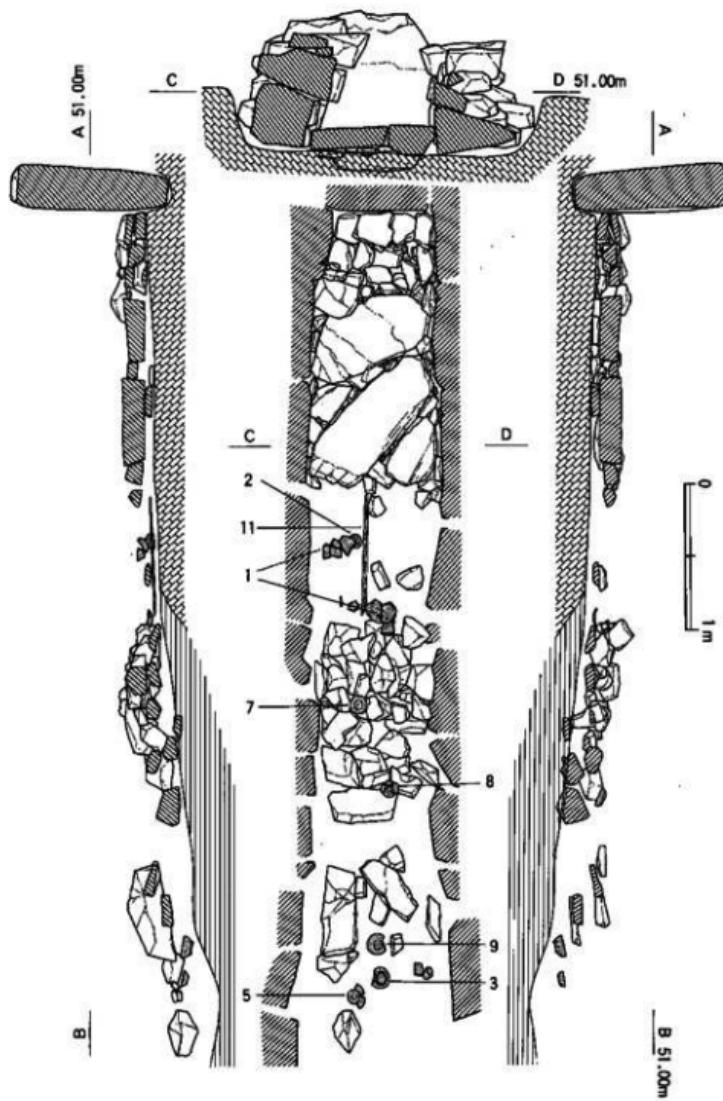
第5図 1号填埋丘図 ($S = 1/100$)



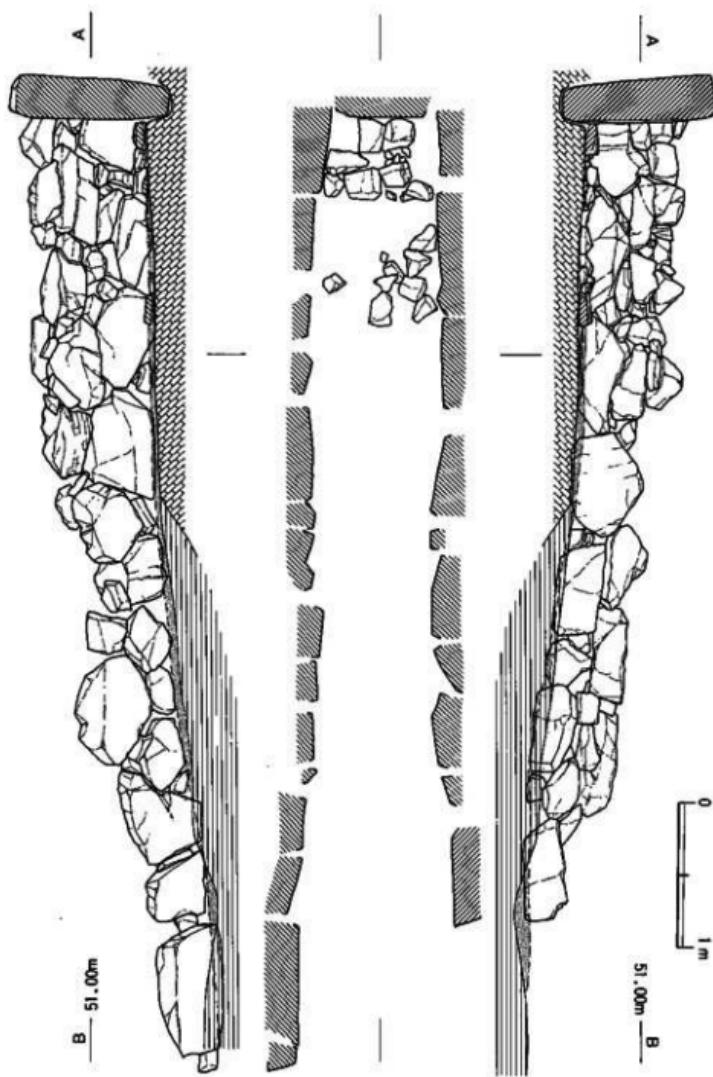
第6図 1号墳墳丘断面図 ($S = 1/40$)



第7図 1号填石室平面図 (S = 1/40)



第8図 1号填石室平面・断面図 (S=1/40)



第9図 1号墳石室平面・断面図 ($S = 1/40$)

大型の石を内面に平滑な面が向くように用いている。2段、3段目には比較的扁平な石を用い、隙間を小石材で充填している。現存する側壁は、3段目まで2段目以上は石材の大きさは不規則であるが、基本的には横口、小口積みである。両壁ともかなり持送り積みとなっており奥壁付近では床面幅85cmに対し最上段で50cmとなっている。

石室前半部は、玄室に較べてより不規則な石積みである。左壁は2段が残存するが上下とも同じ大きさの横長の石を用いている。右壁は、大小の不整形の石材を混在して用いているが、2段目にあたる部分は、ほとんど欠落している。右壁の開口部には若干の小石材が存在することから、外護列石が存在した可能性がある。左壁の開口部は、墳丘と共に流出しているため不明である。

石室の床面は奥壁から1.9mが板石により石敷床、その他は土床である。奥壁よりには、薄い小石材を隙間なく並べ、中央よりに長方形の長さ約1mの板石を斜めに配している。敷石と地山の土床との間には6cm～8cmの隙間があり、きめ細かい黄褐色土が敷かれていた。この隙土中より鉄器片と須恵器の小片が各1片出土した。また後述する鉄刀と須恵器の平瓶と杯も、同様の土に埋まり、高さもほぼ地上床上である。これらのことから、敷石は、追葬時に、新しく敷いた可能性が考えられよう。また、玄室と羨道の境に1.2mにわたって高さ30cmの閉塞石が残っている。この閉塞石も、位置から考えて追葬時のものと考えたい。

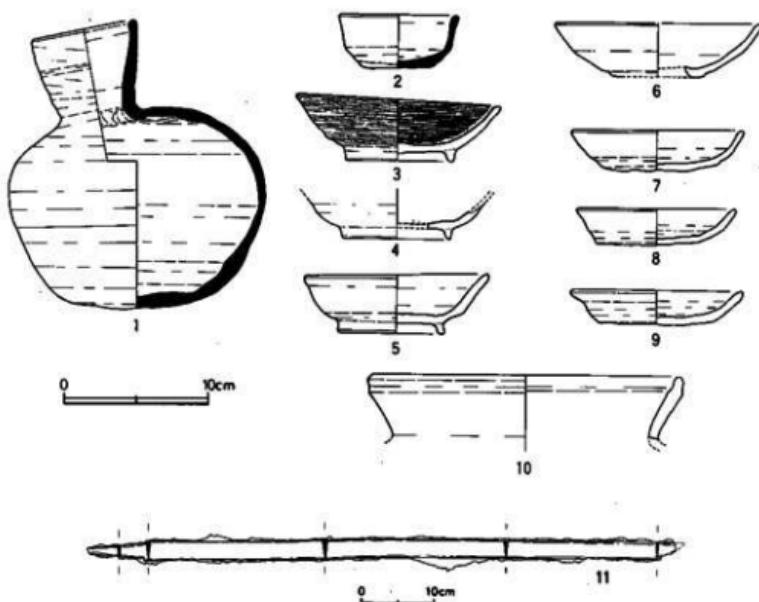
また開口部付近には壁から転落したとみられる石材が散乱している。この閉塞石から開口部にかけての空間は、平安時代に再利用されている。

3. 出土遺物

遺物は、閉塞石と石敷の間に、閉塞石の前面から出土した。須恵器平瓶（1）は、閉塞石に一部が密着した状態で破片で出土した。（2）の須恵器杯は伏せた状態で床面直上で出土した。（11）の鉄刀も、石室中央の床面直上で出土した。以上の3点は、いずれも同様の高さで黄褐色土に埋まっており、同時期の埋葬と考えられる。（3～10）は羨道部の再利用時の遺物である。（7）と（9）の皿は閉塞石に貼りついた状態で、その他は床面上から出土した。これらの土器は淡灰褐色土に埋まり、床面上には炭と焼土が認められた。これから、再利用は羨道部の空間を利用して、なんらかの祭祀、もしくは埋葬が行われたと考えられる。

須恵器 平瓶（1） 体部は、さほど肩が張らず丸く立ち上がる。底部外面はヘラ切り後でいねいにナデを加え、体部下半には回転ヘラ削りが施されている。内面の天井部には、閉塞の円盤痕が残り、円盤を若干切る状態で、やや斜めに穿孔し、注口部を貼付している。焼成は良好で堅緻であり、淡青灰色を呈する。

須恵器 杯（2） 口径8.6cm 底径4.5cm 高さ3.7cmを測る。体部はヨコナデ、底部はヘ



第10図 1号墳遺物 (S=1/4・1/8)

ラ切り後ナデを加えている。焼成は良好で堅緻、淡灰色を呈する。

黒色土器 梶（3・4） 内面に黒色処理をしたA類の「浅梶」である。回転台で成形し、内外面にヘラミガキを加えている。いずれも淡黄褐色を呈し焼成は良好である。

土師質土器 梶（5） 酸化焰焼成の小型の「浅梶」である。焼成は良好で淡黄褐色を呈す。

土師質土器 杯（6） 底部は円盤高台状の杯である。焼成は軟質で淡黄色を呈する。

土師質土器 盆（7・8・9） 底部はいずれもヘラ切り後ナデを加えている。いずれも淡茶褐色を呈し、焼成は良好である。他に図示できない小片が若干ある。

土師質土器 壺（10） 口縁部のみの破片のため器形は不明である。軟質で淡黄色を呈する。

鉄刀（11） ほぼ完形で平造の大刀である。刃渡74.5cm、最大刃幅2.7cm、刃厚0.5cm、残存長81.5cmを測る。刃幅は切先に向かってややせばまる。関は直角両関である。他に敷石下より鉄片が出土したが機種は不明である。

以上が出土遺物の概要であるが、このうち（1・2）と（11）が出土状態から考えて同時の副葬品であろう。（1・2）の須恵器には時期的な矛盾がなく、時期としては7世紀中頃が考えられる。

(3~10)は平安時代の土器である。水島機械金属工業団地協同組合西団地内遺跡群の古墳でも、板井砂奥古墳群の4・6・8・10号墳に平安時代の再利用がみられた。藤原1号墳と板井砂奥古墳群は、なだらかな谷をはさんで約700m離れているため、この谷から平野部にかけて立地する集落により再利用が行われたと考えられる。この場合、板井砂奥古墳群に10世紀中頃にまず行われ、順次移動し、10世紀末に藤原北1号墳に行われたようである。このように、本古墳の再利用例は時期的な変遷がたどれる希有なものと言えよう。

第3節 藤原北2号墳

1. 墳丘・周溝

2号墳は、1号墳の位置する尾根から緩い谷を挟んだ東向き斜面に存在する。谷部に須恵器が認められたため、トレンチを設定したところ、石室を確認した。墳丘盛り土は、ほとんどが流出し、腐蝕土を除去すると、地山面であった。

周溝は、幅1mの浅いものを丸く山側斜面に掘削している。周溝の覆土は、細かい暗褐色土である。石室前面と谷側は、流出しているため墳丘の規模は正確には不明であるが、推定すると直径6mの円墳と考えられる。

2. 横穴式石室

内部主体は、無袖の小型の横穴式石室である。石室の全長は2.2m、最大幅80cmを測り、左壁がややふくらむ平面形を呈している。天井石はすべて失われ、現存する石室の高さは約1mである。石材は花崗岩の転石を使用している。奥壁は2段、右壁が4段、左壁が2段の石積みが残存している。第1段目は奥壁も側壁も同様の大型の石を同じレベルで広口積みにしている。2段目以上は小型の石材を基本的には小口積みでやや持ち送り気味に積み上げている。左壁では欠損しているが右壁1段目の奥から4個目の右からは石室が若干せばまり、積み方もやや乱雑である。この部位より前は現存しないが、同様にあと1m弱は続いていると思われる。玄室と羨道の区別は明確ではないものの若干の意識が残っていたものと思われる。閉塞は50cm×40cm、厚さ30cm程の偏平な石1個をせばまる部分の床に密着させて置き、その上に、やや小ぶりの石を乗せて構築している。

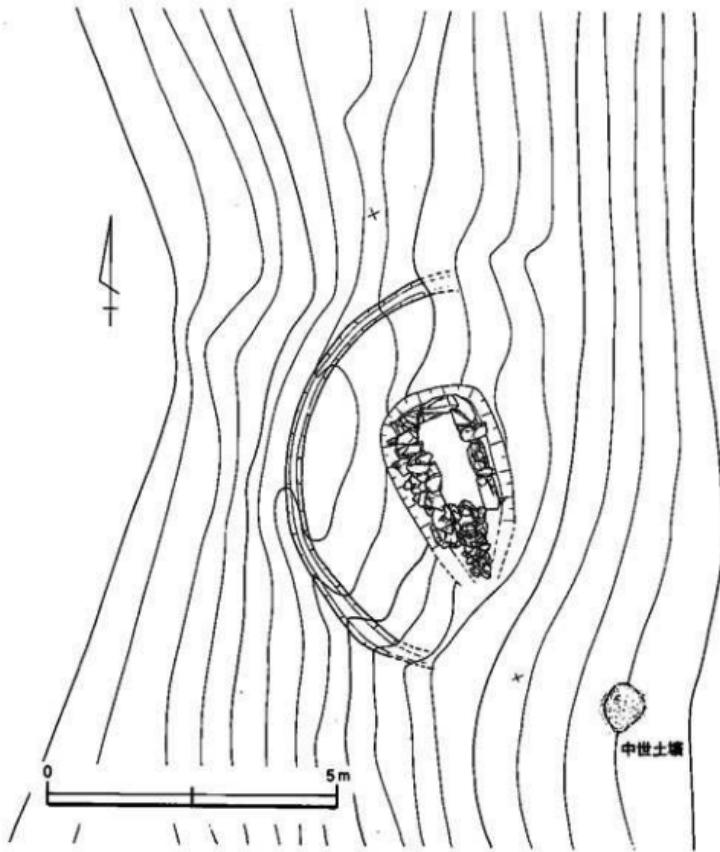
床面は薄く小さな割石を隙間なく、ほぼ1層に敷いている。

石室の掘方は地山（花崗岩土）を掘り込み、開口部になると徐々にしばむ平面形を呈する。

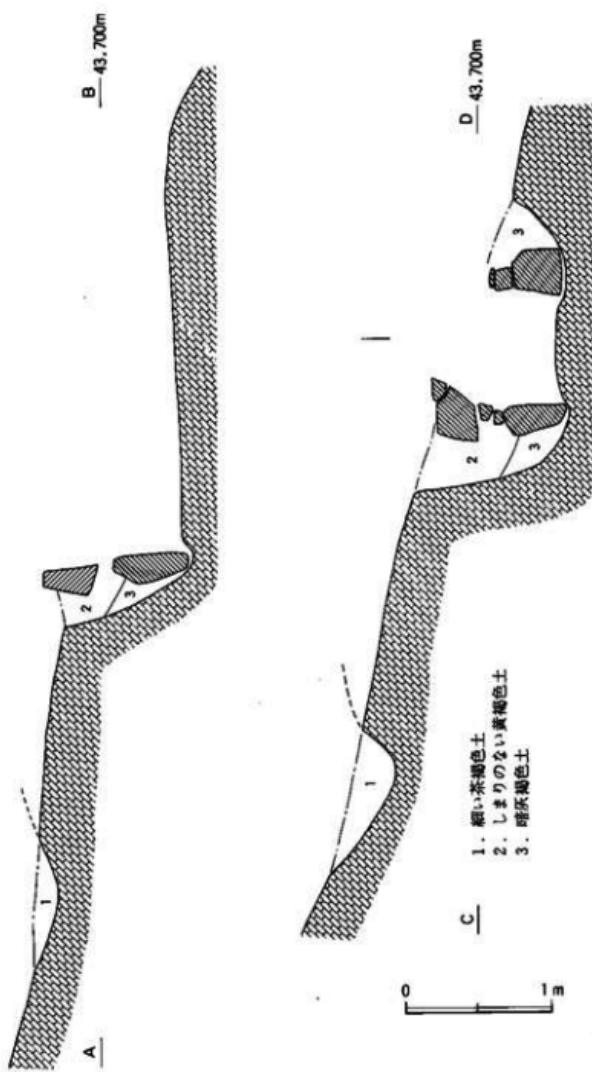
3. 出土遺物

遺物は、石室の床面上から須恵器高杯（1）、須恵器短頸壺（2）が出土した。2個とも敷石に密着していたが、高杯の脚部は細片となって床面上にちらばっていた。石室の前面から下方にかけて散乱した状態で須恵器壺（3）が出土した。本来は墳丘上に供獻されていたと思われる。

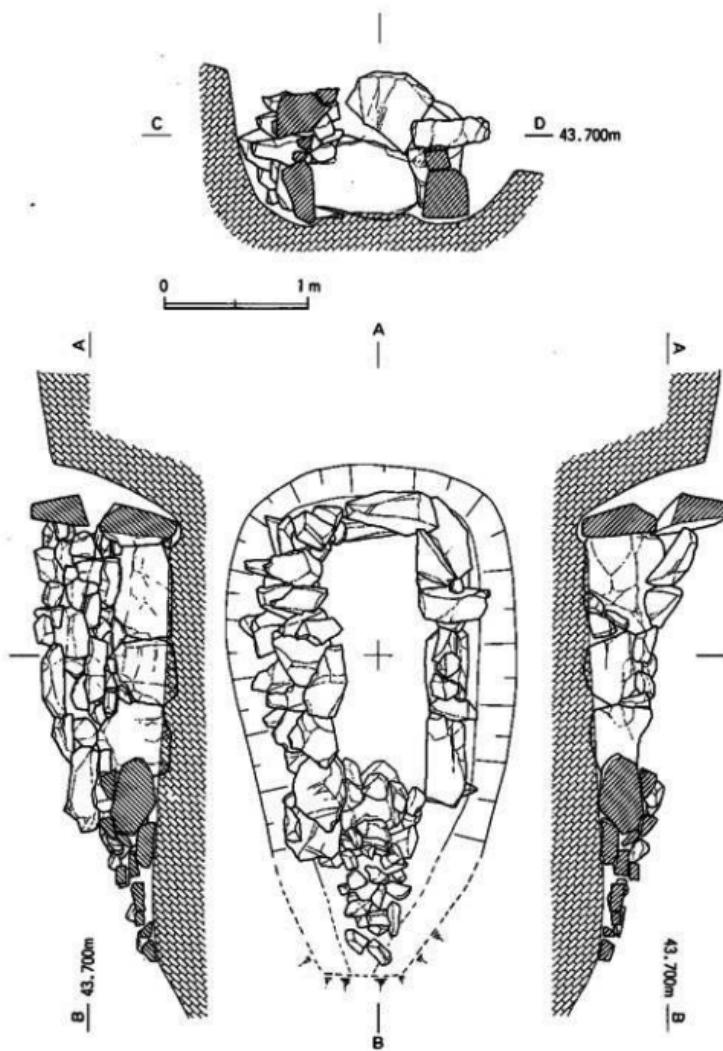
高杯（1）脚部には2段2方向に長方形透孔をもち、2段の透孔の間には沈線が1条入る。杯部には1条の突帯とヘラ描きの斜行沈線文帯をめぐらしている。焼成は非常に良好で堅緻である。



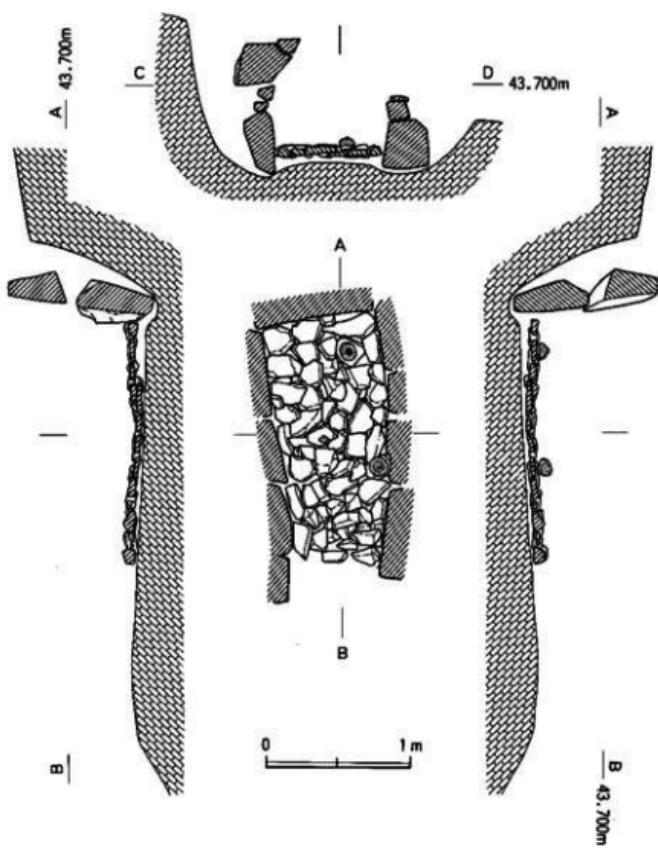
第11図 2号墳墳丘図 ($S=1/100$)



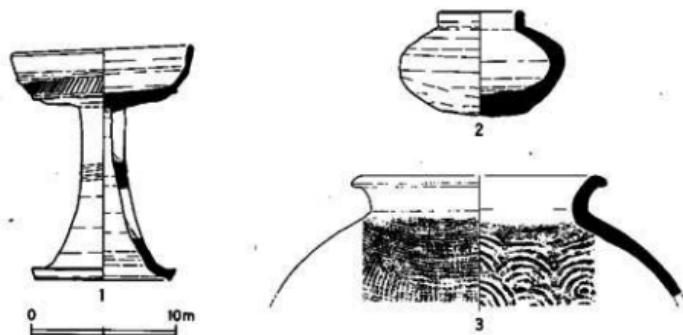
第2図 2号填填丘断面図 ($S = 1/40$)



第13図 2号填石室平面・断面図 ($S = 1/40$)



第14図 2号填石室平面・断面図 ($S = 1/40$)



第15図 2号墳出土遺物 ($S = 1/4$)

暗青灰色を呈する。

短頸壺(2) 全体的に器壁が厚く、特に底部はかなり厚い。体部下半は回転ヘラ削りの後ナデを加えている。焼成は良好で青灰色を呈するが、大粒の砂粒を多量に含む。

壺(3) 口縁部はくの字状に外反して端部は若干肥厚する。体部の外面は、平行タタキの後、カキ目調整である。内面は同心円タタキで青海波が残る。焼成は良好で青灰色を呈する。

以上の遺物はすべて6世紀後半の所産と考えて差しつかえないと思われる。

第4節 まとめ

今回の調査では時期の異なる横穴式石室の古墳2基の内容が明らかになった。出土遺物からみて、1号墳は7世紀前半、2号墳は6世紀の後半に築造されたと考えられる。

以下事実関係をまとめて若干の考察を行いたい。

1号墳

1号墳は、石室長6m50cm、幅1m~75cmの細長い石室で、石の積み方や、若干の減幅に、玄室と羨道の区別がみられる。墳丘は直徑9m前後のややいびつな円形であった。この墳丘と石室形態の変遷についての考察は項を改めて後述する。

1号墳の石室の石組みは奥壁が1枚石で、側壁は1段目のみに大型の石を広口積みにし、2段目3段目は不整形の石を横口、小口積みにしている。このような石の用い方は、市内の同時期の古墳に類例がみられる。今回の調査で最も重要な点としては石室の敷石が挙げられる。石

敷の下から須恵器片が出土したことから、追葬時に新しく板石を敷いたと考えられる。土床部で出土した須恵器と刀は出土状態から石敷より前の埋葬の可能性が高い。又、閉塞石に須恵器の、平瓶片が乗ることから、この埋葬と同時に構築されたと考えられる。この閉塞石も、本来の石室の開口部ではなく途中にあることから追葬時のものと考えるのが妥当であろう。以上のことから最低でも3回の埋葬の可能性が考えられる。

石室内の石敷は、新本川上流域の後期古墳には、普遍的にみることができる。しかしながら、藤原北1号墳と同様の、大型の板石を使用した例は少なく、ほとんどの場合、小型で薄い板石を隙間なく敷いている。本墳と同様の石の用い方をしているのは、沖田奥2号墳、板井砂奥10号墳などである。この割石敷床は、県内の後期古墳でも多くの類例があるが、ほとんどの場合、一定の地域でまとまる傾向がある。総社市内でもやはり新本川流域特有の現象である。

しかし、今回、割石敷床が追葬に伴う新装であることが判明したことから、他のこの地域の古墳の石敷床も同様の可能性を考えなければならなくなつた。また、古池奥2号墳のように土床で棺台石がある古墳もあることから石敷床がある時期の追葬時に集中して行われたことも十分考えられよう。これは石敷の板石の並べ方が、石室の形態変化にあまり関係ないことからも推察できる。

藤原北1号墳の築造時期は出土した追葬と考えられる須恵器が陶邑TK46窯期で7世紀中頃であるため、それ以前7世紀前半と考えられる。これは、石室の形態や石組から考えても矛盾がないと思われる。

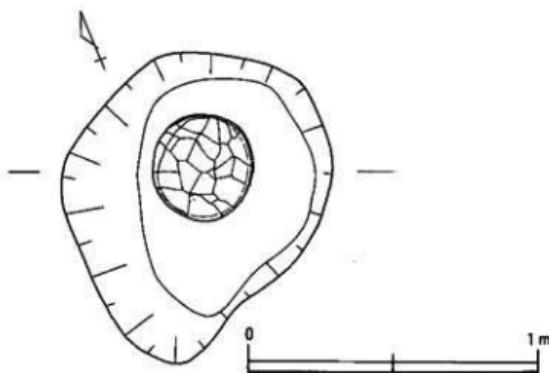
2号墳

2号墳は、直径約6mの円墳である。推定長約3mの小石室を有している。石室の掘り方が、直線的ではなく、石の組み方は奥壁も1段目には比較的整った石を広口積みし、2段目以上には偏平な小石を横口、小口積みするなど1号墳よりも古い様相を示す。また奥壁が1枚石ではないことや、初葬時と思われる須恵器の高杯から、古墳の築造年代としては6世紀後半が考えられる。

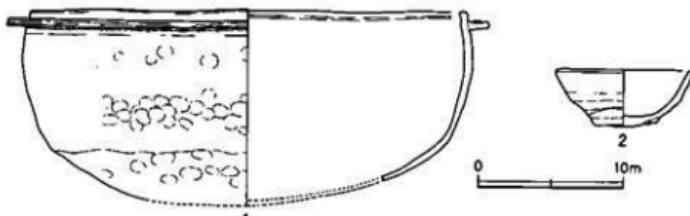
この地域に於ける6世紀後半の横穴式石室は、確実な例としては、板井砂奥7号墳、藤原2号墳などが挙げられる。しかしいずれも、比較的大きな石室で、均等な石材を、丁寧に積み上げている。また、玄室と羨道の区別が明瞭なのが特色である。

それに較べて藤原北2号墳のような小古墳は他に発見例がなく、石室の形態、墳丘の規模もかなり異なる。また石室の規模は当初から卑葬を意識したもので、追葬が当然である他の石室とはやはり異なったものと言えよう。

この違いは、造墓集団内の階層的な差と考えられる。



第16図 中世土壤平面・断面図 ($S = 1/20$)



第17図 出土遺物 ($S = 1/4$)

第5節 中世土壤

2号墳の下方の谷部斜面で、炭が充満した90cm×100cmの不整形の土壤を検出した。覆土は、炭と灰で、除去すると鍔付の土師質の土釜が、伏せられた状態で出土した。その釜中には土師器の椀が1個体伏せた状態で埋納されていた。土壤の端部や壁部には被熱痕跡はない。

土師質土釜(1)ほぼ完形で出土したが、底部は風化がはげしく図示し得なかった。体部は

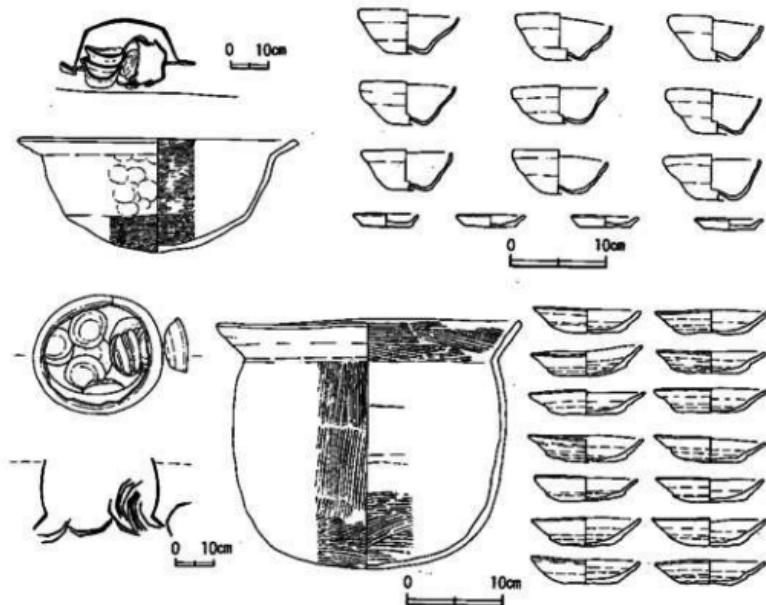
指頭圧とナデで成型され、側は指頭圧で貼付されている。内面はナデを加えて、丁寧に仕上げている。

土師器碗（2）口径9.5cm、器高4cmを測り、かなり難な成型で、実用的ではなく、祭礼専用の器と思われる。体部には明瞭に粘土紐痕を残している。内面は丁寧なナデで黄白色を呈す。

この土壤と同様の造構は、笠岡市本谷遺跡、御津町伊田沖遺跡などにある。本谷遺跡では、鍋を伏せた中に碗10個、小皿5枚が確認された。造構は明確ではないが、報告者は、この造構が谷部に位置することから水利に関係する祭祀造構とされている。時期としては土師器碗から、14世紀後半としている。伊田沖遺跡では、土師器の壁を伏せ、中に18枚の皿を重ねている。時期は11世紀代のものと思われる。本遺跡の造構の時期は、土師質碗が最も小型化し、高台が形骸化することから、13世紀末頃と思われる。

このように、煮沸具を伏せ、中に碗・杯・皿を納めた礼は平安時代から室町時代まで存在し、いずれも谷部の斜面に位置する点が共通している。また骨なども伴わず他に遺物もないことから、墓とは考えられず、なんらかの祭祀、特に水に関するものであったことが推測される。

今後、民俗例も含めて検討したい。



第18図 本谷遺跡（上）、伊田沖遺跡（下）出土遺物（S=1/6）

第4章 考 察

総社地域に於ける群集墳について

現在までに、総社市内では多くの横穴式石室の古墳が調査されてきた。近年、特に市内西部の西団地造成に伴う調査や東部のゴルフ場造成に伴う調査により古墳群単位でその内容が明らかになってきた。

今回、報告する藤原北古墳群は西団地遺跡群の古墳群に近接し、その造墓集團も同じ地域で共通の生産基盤を有していたと考えられる。

従来、古墳時代後期の県内の群集墳については、1つの古墳群すべてが発掘された例があまりなく、その立地、構造、規模と背景について具体的に明らかになったものは少ない。

本稿では、先述の2つの古墳群について、発掘調査で得られたそれぞれの性格を明らかにし比較することによって総社地域の後期群集墳から終末期古墳への変遷の一端を明らかにしたい。

まず、ゴルフ場造成に伴い調査された千引古墳群について簡単に述べてみたい（図21・22）。千引古墳群は、古代山城、鬼ノ城の眼下に派生する標高150m前後の急峻な尾根に存在する。古墳群は10基で構成され、裾部に3基、尾根の南斜面に7基が構築されている。このうち裾部の1・2・8号墳は6世紀後半から7世紀前半に築造されたものである。1号墳は片袖の6.5mの石室を有し、8号墳は方形の外護列石がめぐらされている。尾根上の古墳は、いずれも7世紀末頃まで築造されたもので、そのなかで最も古い6号墳は8号墳よりもやや後出する時期である。石室の形態は、6m以上で狭く長い3・6号墳から徐々に短くなり小規模になる。そして7世紀末頃の7号墳では、木炭床で、円面窓が副葬されている。これら石室が3m以下の小古墳は墳丘が方墳である。このように千引古墳群は、裾部と尾根上の古墳にはっきりと時期的、構造的な変化があるのが特色である。

一方、西団地遺跡群で調査された古墳は36基で内、横穴式石室は28基である。この中には、横穴式石室導入期の板井砂奥7号墳、前方後円墳である立坂北1号墳などがある。

これらの古墳は若干の終末期のものを含むが、ほとんどが所謂、後期群集墳である。そしてこの古墳のはほとんどは、石室内に石敷が施されている。この石敷は先述したように、追葬の時に新たに敷かれた可能性が強く、当然石敷上の出土遺物は古墳の築造年代を表わしていないと思われる。そのため、これらの古墳の前面か、開口部に掻きだされている遺物の中で最も古い時期の土器と、石室の形態からしか古墳の築造年代を推察する他はない。

この視点により残存状況から石室を概観すると、形態、規模、遺物などからその様相は2つに大別できる。

A類とするものは（1）墳丘の規模が10m前後で大きい。（2）石室は、袖がある、もしくは、若干意識が残っている。（3）石組は、基底部の石が均等で整った形が多く、2段目以上も横積みにし、丁寧に積み上げている。（4）奥壁は1枚ではなく、2個以上の石を上下に組み合している。以上のような特色がある。

B類としたものの特色は（1）墳丘が比較的小さい。（2）石室は狭く長いものから、狭く短いものへと変化する。（3）側壁の石組は基底の石の大きさも不規則で、石は広口、小口積みしているものが多い。（4）奥壁は1枚石などが挙げられている。

このA類とB類の差は、時期的なものと考えられ、中間的なものも当然存在する。そして、その変化は基本的には、墳丘規模の縮小化・簡略化・無抽化・副葬品の減少という傾向であることは明瞭である。

まず、この大まかな変遷を、西園地の古墳群にあてはめてみる。A類とした石室の典型には、藤原2号、沖田奥2号、板井砂奥5号・10号などが挙げられる。これらの古墳の築造時期は6世紀後半から7世紀初頭と考える。玄室は片袖、両袖にかかわらず、幅1.5m前後、長さ4m前後であり、空間的には追葬もしくは複葬が前提となっていると考えられよう。ただ、今回報告する藤原北2号墳のように同時期でも被葬者の階層差を表すかのごとく規模、構造の異なるものもあり、前記の定義は一律ではない。この家族墓的性格を有しない後期古墳については、同時期の箱式石棺の問題も含めて検討する必要があろう。

次にB類とした古墳には、又五郎谷2号墳、板井砂奥11号墳、沖田奥5・6号墳、藤原4号墳、立坂北3号墳、そして今回調査した藤原北1号墳などが挙げられる。

このうち、沖田奥5号墳は、石室が切り石積み的とも考えられ、方墳ということと併せて考えるとやや別な意味を考えなければならないと思われる。他の古墳はすべて出土した須恵器からみても陶邑編年TK217の古相以降の時期であり、立坂北3号墳の7世紀末葉までの所産と考えてよいと思われる。このB類への変化は、かなり急速とも言える様相で変化し、また、古墳の築造数も増えたとも思われる。すなわち、石室の幅が狭くなり家族墓的な要素が払拭され、被葬者が特定化されたと考えられよう。

この葬送意識の変化は、ちょうどこの時期に古墳と立地を重複させて製鉄がさかんになったことと関係があると思われる。製鉄は燃料の供給、作業場の確保など、かなりの面積の土地占有が必要となる。また製鍊だけではなく、原料の鉱石の採掘、集落での製品化などかなり一体化された政治的意志のもとでの協業が必要である。そのため、製鉄集団の統制にはかなりの地域にまたがる政治勢力が想定されている。この政治勢力の変質とともに古墳の規模の縮小

化、被葬者の特定化が顕著になる傾向は、古墳時代終末期から古代にかけてこの地域の置かれていた状況を物語っている可能性が十分考えられよう。

次に千引古墳群であるが、この古墳群は立地のためか、あまり搅乱。盗掘を受けていない古墳が多く埋葬形態の変遷を知る上では良好な古墳群である。

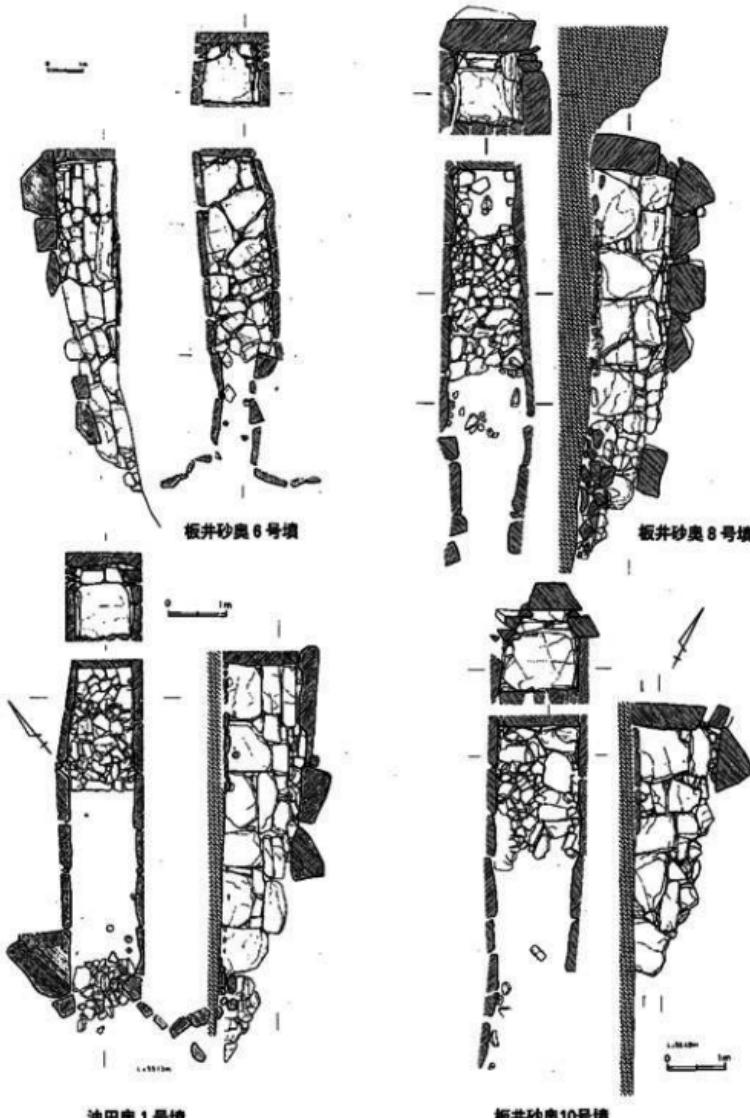
丘陵裾部の三基の古墳のうち有袖の大型の石室を有する1号墳以外はすべて、先述のB類に含まれるものばかりで、時期はTK217の古相の8号墳から7世紀末葉の7号墳まで近接する林崎1号墳も含めて11基の内容が明らかになっている。このうち1号、2号、8号が裾部、他は丘陵頂部の南面に位置し、国府推定地を含む平野を眼下に眺望している。

丘陵上の古墳のうち最も古相で大きい6号墳は長さ6m、幅1m弱の細長い石室で、明らかに縦列に2棺を埋葬した状況で遺物が出土した。出土した須恵器は奥の棺に併うものがTK217古相、手前がTK217新相のものであった。奥の遺物はまったく1号墳のように片付けられた様子はない。6号墳と同じ規模の3号墳との間には同じ高さで4・5号墳が並列して構築されている。この4・5号墳や10号墳、林崎1号墳はすべて单葬と見られ、時期的にも徐々に下っていく。若干規模は大きい9号墳も石室の石の用い方や、開口部にやや開き気味になることから同時期と考えられよう。これらの单葬墳の最後には、先述の木炭床で円面鏡が出土した7号墳が位置すると思われる。さらに古墳に近接もしくは同じレベルで骨蔵器が数多く出土している。このことは、丘陵上の古墳と骨蔵器は同じ眺望を意識して立地していると言っても過言ではないと思われる。

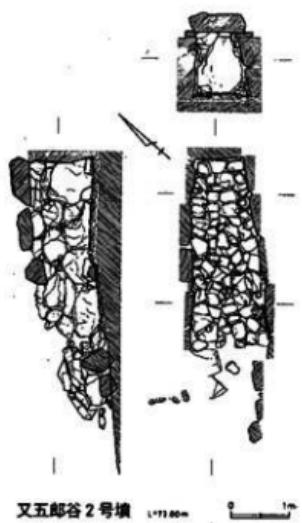
この千引丘陵では6世紀後半以降、活発に製鉄が行われており、横口付の炭窯も24基が調査された。またすべての古墳に鉄鋤の供獻がみられ、特に林崎1号墳では高杯に入れられた状態が確認できた。これは、この古墳群の被葬者たちが製鉄にかかわりがあったことを証明し、また、円面鏡を使用し、火葬を取り入れ、さらに同じ眺望を意識した同じ系統の政治勢力であったと想定することができよう。

最後に、今回、総社市内の2つの古墳群について大まかに比較を行った結果、同じ後期から終末期の群集墳でも、その立地や、歴史的背景、政治集団の違いによって大きく様相が異なることが判明した。このことは古墳群の比較検討にあたっては、その造墓集団の諸条件の違いが古墳に反映されるという認識が重要であると考えられる。また、前期古墳から連続と統いて造墓活動を行う地域と政治的要因で突然造墓活動が開始される地域があることなども今後の検討課題であろう。

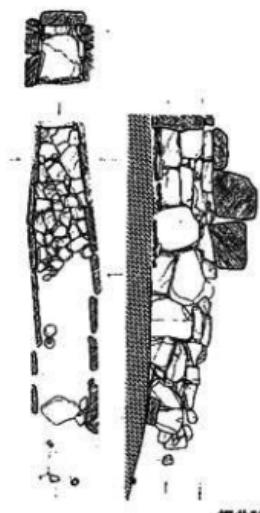
以上、今回は未発表資料を多く使用したため端的かつ断片的な検討となつたが、今後の問題提起としたい。



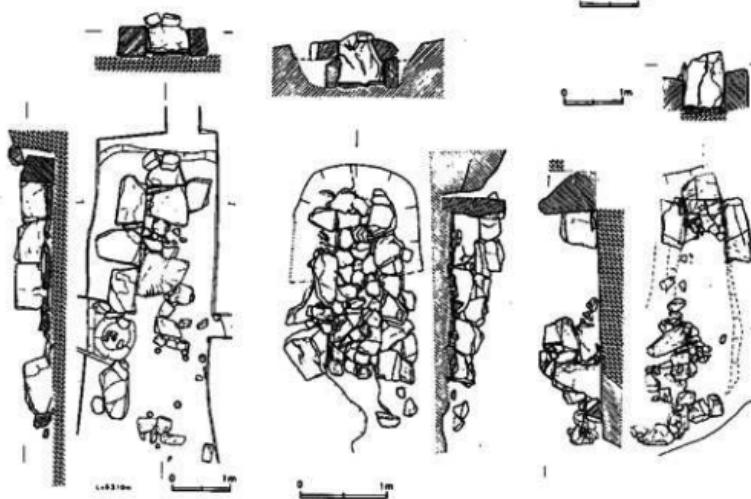
第19図 石室平面図 ($S = 1/100$)



又五郎谷 2号墳



板井砂奥 11号墳

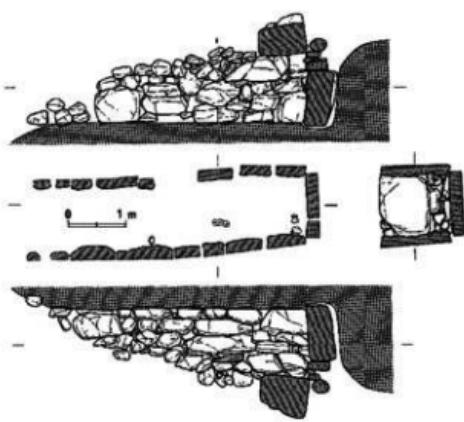


沖田奥 5号墳

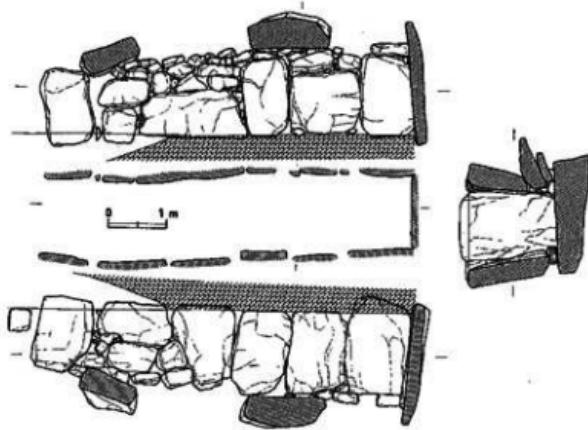
又五郎谷 3号墳

立坂北 3号墳

第20図 石室平面図 ($S = 1/100, 1/80$)

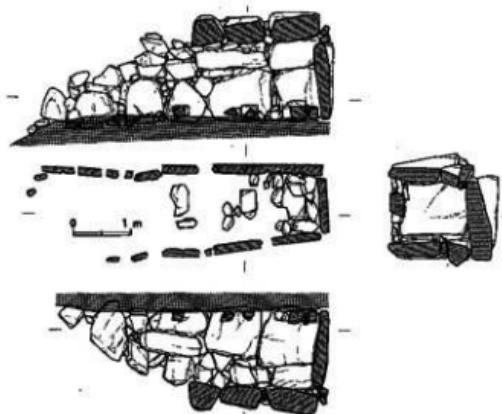


千引 8号墳

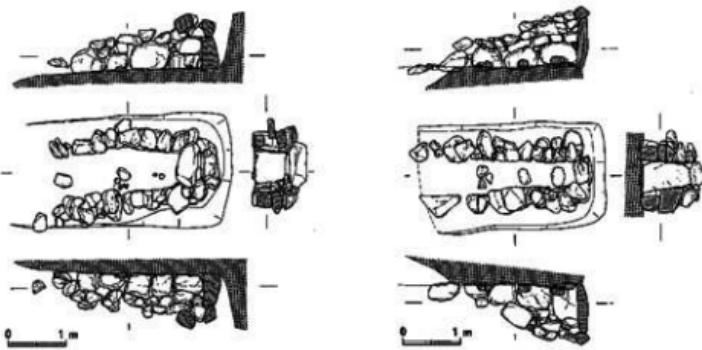


千引 6号墳

第21図 石室平面図 ($S = 1/100$)



千引8号墳



林崎1号墳

千引10号墳

第22図 石室平面図 ($S = 1/100$)



1. 藤原北古墳群遠景（東から）



2. 1・2号墳調査前（南から）

図版2



1. 1号填石室閉塞石（南から）



2. 1号填石室閉塞石遺物出土状態



1. 1号墳石室（南から）



2. 1号墳遺物出土状態（南から）

図版 4



1. 1号填石敷（北から）



2. 1号填石敷除去後（南から）

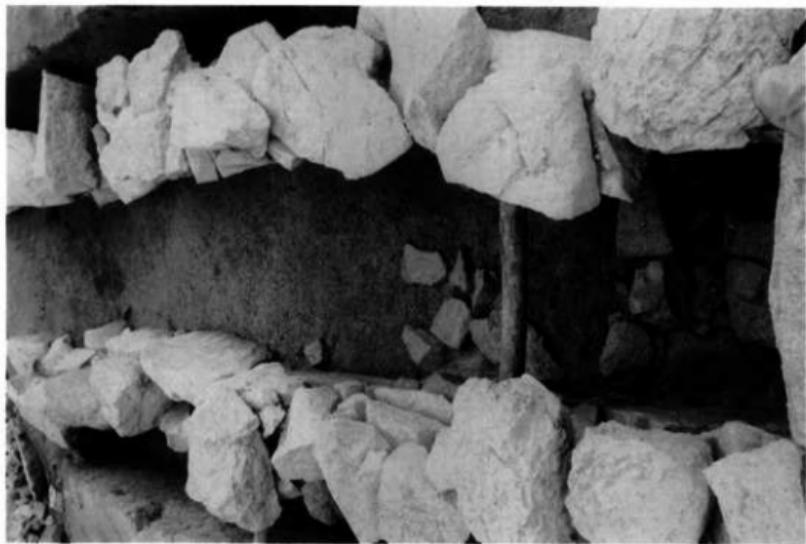


1. 1号墳石室（南から）



2. 1号墳奥壁（南から）

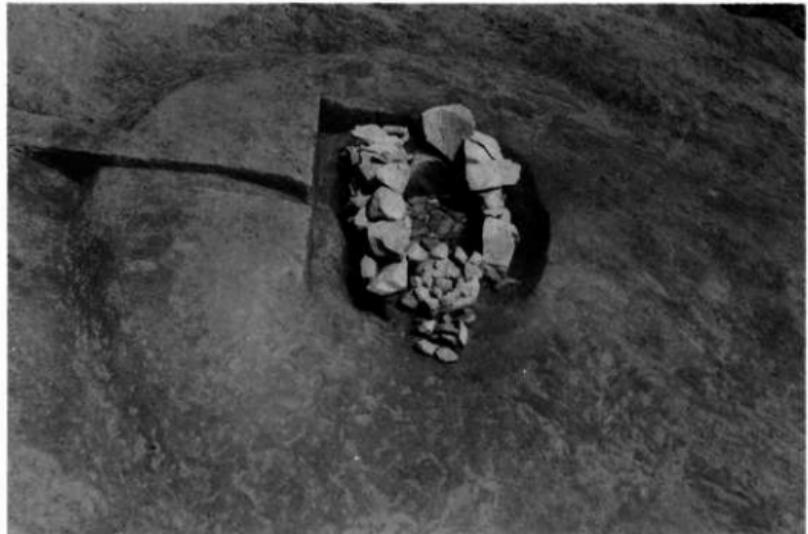
図版 6



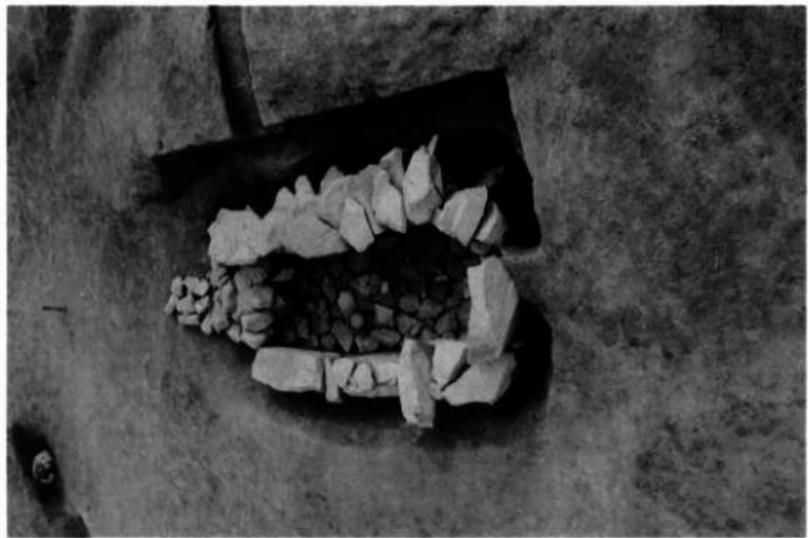
1. 1号墳石敷除去後（北から）



2. 2号墳調査作業遠景（南から）



1. 2号墳全景（南から）



2. 2号墳石室（北から）

図版 8



1. 2号填石室床面遺物出土状態（北から）



2. 2号填石室床面遺物出土状態（南から）

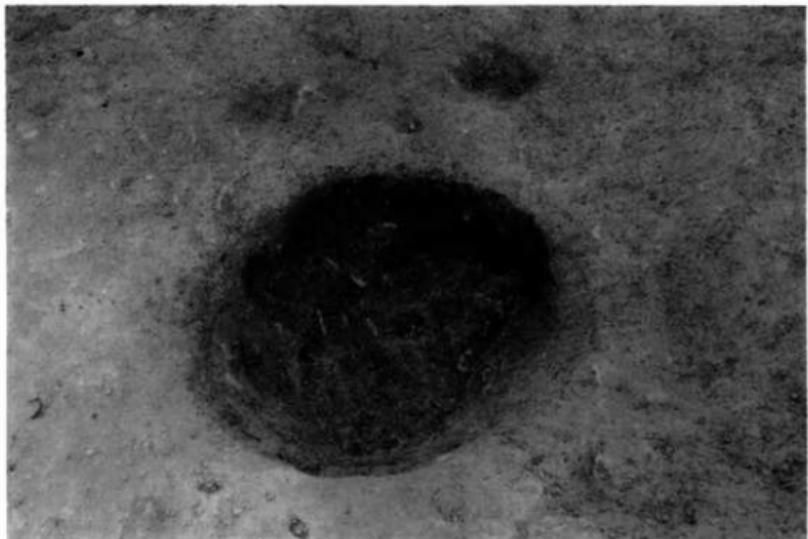


1. 2号墳石室（東から）

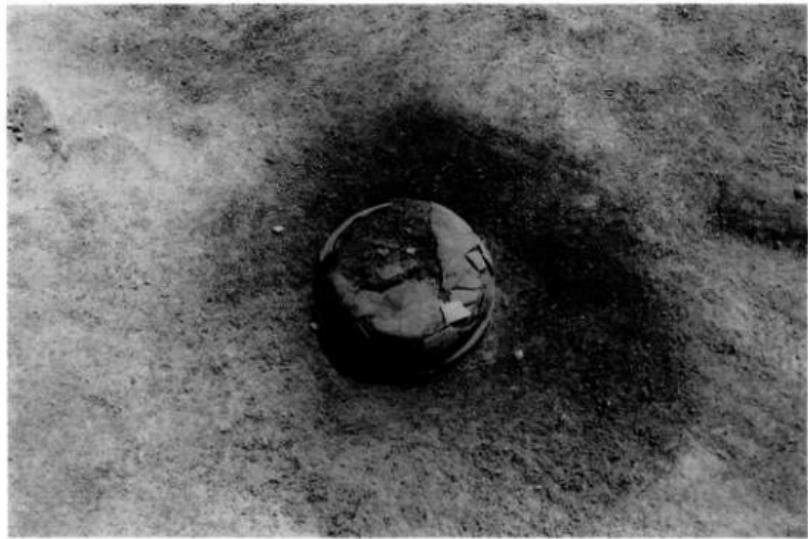


2. 2号墳石室石敷除去後（南から）

図版10



1. 中世土壤検出状態



2. 中世土壤土蓋出土状態



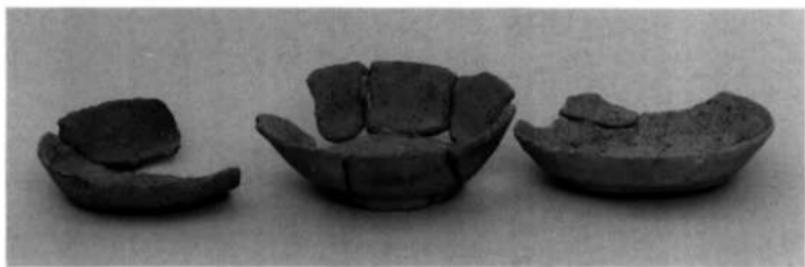
1. 1号墳出土土器



2. 1号墳出土土器



3. 1号墳閉塞部出土土器



4. 1号墳閉塞部出土土器

図版12



1. 2号墳出土土器



2. 中世土壙出土土器



3. 1号墳出土鉄刀

総社市埋蔵文化財発掘調査報告

藤原北古墳群

1993年3月 印刷

1993年3月 発行

編集発行 総社市教育委員会
総社市中央一丁目1番1号

印刷 柳本印刷株式会社
総社市総社一丁目10番24号

